マレーシア華文文学の周辺
——具体的な作品の分析を手がかりに

楊　　暁　文

一

日本では、マレーシア華文文学（中国語でいう「馬華文学」）についての研究があまり見受けられない。ゆえに、その周辺を整理しておく必要がある。本稿において、シルビア・シエン（1966～）の『親愛なるデニス』というユニークな作品を通して、マレーシア華文文学を取り巻く環境、その周辺について考えてみたい。

デニスとは「私」のルームメイトのハヤディが部屋に入れた野良猫の名前である。同じ部屋に住む者同士の間に、その猫をめぐっての、試練が多い。

> 宿舎に引っ越して二日目、私はデニスとかたき同士になった。外から戻って部屋のドアを開け、何気なくドアマットを踏みつけた。とたんに足の下で「ギャオー」という物凄い声。私も「キャー！」足の甲に鋭い痛みが走った。私はしゃがみ込んで、いったい何が起こったのかわからなかった。足から血が出ていた。真っ黒な猫がすばやく私の横をすり抜けて外へ飛び出して行くのが見えた。私はカッとなって履物を手に取り、力いっぱいバカ野郎に投げつけた。その時、昼寝から覚めたばかりのルームメイトのハヤディを詰問した。「あの猫はどこから来たの？」
>
> ハヤディは寝ぼけ眼に戸惑いを浮かべ、唇を引きつらせてぎこちなく微笑み、申し訳なさそうに言った。「デニスが噛んだの？　ごめんなさい。本当にごめん。私が部屋に入れたの」
>
> それを聞くと痛さにのぼせた頭も少し正気に戻りはじめた。この二〇五号室に二人の人間が住む以外に、一匹の猫が入る余地もないのか。
>
> 「こら、落ち着け、落ち着け」私は心の中で自分に言い聞かせた。まだ二日目だぞ。何があっても忍の一字。よく知られているように華人とマレー人は初めからウマが合わない。試練は多い。
>
> （『東南アジア文学への招待』、発行　段々社、発売　星雲社、2001 年、251 ページ）

象徴的な意味に富んだ小説である。マレーシア華人の代表のような「私」、マレー人のルームメイト・ハヤディ。このような二人が共存するか、対立するかはマレーシアにお

ける華人とマレー人の運命を占うような人物設定である。そこに、猫・デニスが登場してきた。だから、ごく自然に、「この二〇五号室に二人の人間が住む以外に、一匹の猫が入る余地もないのか」という意味深長な問いが生まれてくる。なぜなら、ここの「二人の人間」がほかでもなく、華人とマレー人である。そして「華人とマレー人は初めからウマが合わない」と作者は言う。

なぜ「華人とマレー人は初めからウマが合わない」のか。

> 1957年8月31日，マラヤ連邦（マレー半島の11州）はイギリスからの完全独立を実現した。初代首相ラーマンは，最高裁判所前の広場で高らかに独立を宣言した。9つの州のサルタンが互選で5年毎に国王を選出し，信教の自由は認めながら，国教はイスラム教に定められ、マレー語が唯一の公用語とされた。マレー人の特権が数多く認められ、イギリスがマレー連合でめざした各民族対等の社会とは異なった形での独立となった。
> （『写真記録　東南アジア―歴史・戦争・日本3　マレーシア・シンガポール』、ほるぷ出版、1997年、191ページ）

ここに、「華人とマレー人は初めからウマが合わない」という社会現象を生じさせた歴史的な原因があった。多民族国家なのに、「信教の自由は認めながら，国教はイスラム教に定められ、マレー語が唯一の公用語とされた。マレー人の特権が数多く認められ」たのである。このように「各民族対等の社会とは異なった形での独立となった」ことが、民族間対立の火種になった。1963年9月16日、マラヤ連邦にサバ州、サラワク州とシンガポールが加わり、マレーシア連邦が発足したものの、民族間の対立は連邦成立後の大きな問題となった。

> マレーシア連邦成立後，国内政治を大きく揺るがしたものは，民族対立だった。1964年7月21日にはシンガポールで中国系とマレー系の住民の衝突が起き，軍隊が出動して2週間にわたり厳戒態勢を敷いた。その間，市民は日中数時間の外出を認められただけだった。この衝突で23人が死亡，450人が負傷した。
> （同上194ページ）

作者は「華人とマレー人は初めからウマが合わない」という婉曲な表現をしているのだが、その表現のむこうに、「中国系とマレー系の住民の衝突が起き，軍隊が出動して2週間にわたり厳戒態勢を敷いた。その間，市民は日中数時間の外出を認められただけだった。この衝突で23人が死亡，450人が負傷した」ような重い歴史の悲劇があったこ

とを読む者に想起させようとしてもいる。

では、そうした民族間の対立をなくす方法はないのだろうか。

二

「今度は絶対許さない、絶対だめ！　あのクソ猫は私にばっかり悪さする」私は目の前のト蓮に拳を振りかざして言った。

「まったく、あなたが自分で招いたことよ。最初に部屋をシェアするときから私はあなたに言ったはず。替わったら？　マレー娘と住むと問題続出。まだわからないの。種族大団結すべし！　そうでしょ」ト蓮は繰り返し「そうでしょ」を言っているうちに興奮してきて、後から後から文句が湧いてきた。「あいつら一日五回もお祈りして。恐くないの？」顔が引きつってきた。忠告を聞かないばっかりに、彼女の予言どおりになるのか。

もともとルームチェンジするつもりはなかった。なぜなら必要ないから。ルームメイトがマレー人だからって、そんなの理由にならない。一人の異民族同胞と朝から晩まで一年間過ごす。私の一生でこんな機会は二度とないだろう。

「やつらときたら、スカーフが汗臭いのなんの……」ト蓮はいよいよ核心に迫った。

（前掲書『東南アジア文学への招待』252-253 ページ）

民族間の対立の解決をはかるには、宗教の問題や文化の問題や生活習慣の問題などを考えることが必要不可欠である。現にマレー人における「一日五回もお祈りして。恐くないの？」「スカーフが汗臭いのなんの……」に対して、もう一人の登場人物・華人のト蓮は批判的、否定的な態度を示している。

宗教の問題について考えてみよう。

一口に宗教といっても、複合民族社会のマレーシアにおいては、土着系民族の宗教があり、マレー人の宗教があり、中国系の宗教があって、インド系民族の宗教もある。ここでは、マレー人の宗教に焦点を絞る。

マレーシアにおいて社会的政治的にもっとも大きな力をもっている民族は、マレー人である。マレー語でウガマ（ugama 宗教）といえば、それは通常イスラム教のことを指すくらいである。信仰の自由は保障されているが、イスラム教だけには特別の地位が与えられ、マレーシア連邦の宗教として憲法に規定されている。国には、国立のモスク（masjid）があり、州には州立のモスクがある。しかし、この宗

教の保護者は国王ではなく、伝統に従い、各州のスルタンが各州のイスラム教の首長である。スルタンのいない州では、スルタンの互選によって五年ごとに選ばれる国王がムラカ、ペナン、サバ、サラワク諸州のイスラム教の首長となる。このようなイスラム教の性質を理解せずに、マレーシア社会の性質を理解するのは、樹を見て森を見ずのたとえに等しい。（中略）

このようなイスラム教の中核をなすのは六信と五行である。六信とはアッラー、天使、経典、予言者、来世、運命に対する信仰である。このうち最重要事は、唯一無二、全知全能、無始無終の神アッラーに対する信仰である。天使は神と人間の仲介者であり、経典にはモーゼの五書、ダビデの詩篇、キリストの福音書をも含むが、もっとも完全なものは教祖マホメットに対してアッラーより啓示されたコーランである。予言者のなかでは、マホメットがアッラーの真の使徒であり、予言者である。来世では、現世におけるあらゆる行いが審判の日に清算され、アッラーによって善悪は公平に報いられる。運命の信仰とは、善悪にかかわらずあらゆる運命はアッラーの慈悲の賜物として、感謝して受け入れることである。マレーシアのイスラム教は予言者の言行にもっとも忠実に従うスンニー派のシャーフィー学派に属する。

五行とは、アッラーに服従帰依している者としての心身生活をまっとうするための戒である。信仰の告白、礼拝、斎戒、（断食、ラマダン、マレー語ではプアサ puasa）、喜捨（ザカート　zakat）、巡礼（ハッジ　hajj）よりなる。信仰の告白とは、「アッラーのほかに神なく、マホメットはアッラーの御使いである」をアラビア語で絶えず唱え心に命ずることである。礼拝は夜明け、正午すぎ、日没前、日没後、就寝前の一日五度の礼拝と金曜のモスクにおける礼拝であって、メッカの方向に向かって行う。

（『もっと知りたいマレーシア』、弘文堂、平成6年12月15日第2版、134-137ページ）

一口に宗教といっても、いろいろな理解が可能であり、さまざまな次元がある。ここでは、原始宗教などはさておき、民族宗教、つまりマレー人の信仰するイスラム教のことに筆者の学問的関心がある。マレーシアは多民族国家であり、「信仰の自由は保障されているが、イスラム教だけには特別の地位が与えられ、マレーシア連邦の宗教として憲法に規定されている。国には、国立のモスク（masjid）があり、州には州立のモスクがある。しかし、この宗教の保護者は国王ではなく、伝統に従い、各州のスルタンが各州のイスラム教の首長である。スルタンのいない州では、スルタンの互選によって五年ごとに選ばれる国王がムラカ、ペナン、サバ、サラワク諸州のイスラム教の首長となる」。ゆえに、マレーシアにおける他の民族宗教より高いところに位置付けられているイスラ

ム教を見る各民族のまなざしも複雑である。アッラーは彼らにとって、唯一にして絶対的な存在であるため、礼拝の対象となる。そして「礼拝は夜明け、正午すぎ、日没前、日没後、就寝前の一日五度の礼拝と金曜のモスクにおける礼拝であって、メッカの方向に向かって行う」ものである。このような宗教的行為はアッラーを神格化ししていない他民族の人々に理解され難い。そこがト蓮の「一日五回もお祈りして。恐くないの？」が生まれてきた所以ではないかと思われる。

宗教とは抽象的なものであるため、それを生活のなかで具体化・具象化する必要もある。言い換えれば、内的な性質を有する宗教は外的ななにかによって表される（具体的な形をとって現れる）とき、宗教が人々に身近、確かなものとして見え、リアリティーをもつものとして感じられ、ある種の象徴となる。シルビア・シエンの「親愛なるデニス」に即して言えば、マレー娘の毎日身につけているスカーフがマレー族特有の宗教的象徴性をもつものの一つである。それがト蓮の目には「スカーフが汗臭いのなんの……」のように映ったが、宗教的概念や生活習慣や文化的背景などの異なる華人娘のト蓮にその宗教的象徴性がくみとられていないからである。

三

私が怪我をして以来、ハヤディは決してデニスを部屋に入れなかった。私はしばらくデニスの姿を見なかったし、ハヤディに猫がどこへ行ったか聞くこともなかった。猫は我々の「敏感問題」だった。どちらも触れたがらなかった。ちぇ！たった一匹の猫のことで、私たちの関係はとても緊張したものになった。私は一九八七年の中南街を思い出した。（五·一三事件以来、最も民族間が緊張した一九八七年の国内治安法発動時の記憶を指す）
（前掲書『東南アジア文学への招待』254 ページ）

マレーシア華文文学を研究するに避けて通れないのは華人とマレー人との間における「敏感問題」である。この「敏感問題」が生まれた背景（同時にそれを生ませた要因でもある）に一九八七年の国内治安法の発動があったが、それより深刻な、根源的な事件は五・一三事件であった。この事件について簡単にまとめようとすれば、次のようになるであろう。

マレーシアもまた民族対立を内包していた。多数派のマレー系よりも、中国系の方に経済の実権があり、それでいてマレー系が政治上は優遇されていた。小ぜりあいが日本軍の敗退以後あちこちにあったが、1969 年 5 月 13 日のクアラルンプール

の暴動は深刻だった。中国系の店が襲われ、死者は178人に及んだ。
（『写真記録　東南アジア―歴史・戦争・日本3　マレーシア・シンガポール』、ほるぷ出版、1997年、194ページ）

以上の記述はマレーシアにおけるマレー系と中国系の根深い恨みに似た感情の由って来る歴史的な原因を説明するに簡単すぎたきらいがある。マレーシアの歴史に残ったこの大きな事件を探ろうとすれば、その政治的な側面を明らかにしなければならないであろう。

一九六四年選挙でUMNOと連合党の基盤を強化したラーマン首相は、シンガポールの分離独立を実現し、六五年の九・三〇事件によってスカルノが権力を失っていったことによってインドネシアとの和解を進め、フィリピンともサバ問題で妥協をはかり、一九六七年八月には東南アジア諸国連合（ASEAN）の結成に加わった。一九六五年二月のアメリカの北爆によって始まったベトナム戦争が激化するなかで、東南アジアの反共国家の地域協力体としてのASEANがつくられ、マレーシアもこれに参加したといえる。

この一九六七年はマラヤ連邦独立から一〇年目に当たり、憲法の規定により、マレー語の国語・公用語化がきまり、官公庁、教育機関でマレー語の使用が実行されていった。このため、華人とインド系人の間では、自分達の言語や文化が失われマレー語が強制されることに対する不満が高まっていった。また、マレー人社会の内部では、農業、農村開発によってマレー人農民の生活は向上していったが、商工業の分野は依然として華人とインド系人に握られ、エスニック・グループ間の経済格差が拡大していることに対する不満が内向していた。

こうしたなかで一九六九年五月一〇日に下院議員選挙が行われたが、連合党が八九議席から六七議席へと議席をへらし、とくにMCAは二七から一四へと半減し、逆に野党のPMIPは一二、DAPは一三、選挙直前につくられた民族統合型の政党であるマレーシア民政運動（Gerakan Rakyat Malaysia, GRS）が八議席をとった。このことは、華人、インド系人の不満が野党支持に廻ったことを示しており、この結果をふまえてDAP支持の華人青年が野党勝利の行進を計画した。これに対し、五九議席から五一議席に減ったとはいえ第一党を維持しているUMNO支持のマレー人青年が華人に対抗して行進を計画し、五月一三日に両者がクアラルンプールで衝突し、ここに流血の「人種対立事件」（racial riots）が起こった。マレー人の軍、警察の出動により、事件は短期間で収まったが、死者一九六人、負傷者四三九人を出し、そのなかでは華人の犠牲者が多数を占める結果となった。

（『もっと知りたいマレーシア』、弘文堂、平成6年12月15日第2版、223-224ページ）

「死者は178人」と「死者一九六人」との間に記述の不一致は見られたが、五月一三日事件はマレーシアの歴史における流血の「人種対立事件」（racial riots）として語られている。現に「平常は何もないように見えていても，一度火がついた時の相互不信の恐ろしさ。現在でもこの時の恐怖は，人びとに強く残され、問わず語りのうちに各民族のなかで語り継がれている。ただし，歴史教育では避けて通ろうとする姿勢も見られる。歴史の教科書を始め、ほとんどの文献に当時の写真が見当たらないだけでなく、当時の新聞にも生々しい写真は少ない。一貫した報道規制がうかがわれる」（『写真記録　東南アジア―歴史・戦争・日本3　マレーシア・シンガポール』、ほるぷ出版、1997年、194-195ページ）。だからこそ、この民族対立の事件及びこれに似た「一九八七年の中南街」に触れた際、文学作品も、婉曲な表現しか用いられず、「ちぇ！たった一匹の猫のことで、私たちの関係はとても緊張したものになった。私は一九八七年の中南街を思い出した。（五・一三事件以来、最も民族間が緊張した一九八七年の国内治安法発動時の記憶を指す）」、という文脈になっていたのではないだろうか。

四

ある日、ト蓮の部屋に行ったときのこと、彼女は阿燕や秀美と大皿の乾し肉を楽しそうに食べている。阿燕は乾し肉をほおばりながら私に言った。「食べなよ、乾し肉」私が手を伸ばしたとたん、秀美はあわてて手を叩いてわざとらしく言った。「こらこらこら、これは乾しブタ肉よ。なんであんたが食べるの？」私は彼女が何を言っているのかわからなかった。ト蓮がすぐ言葉を継いで言った。「ブタ肉よ！　ブタ肉食べた後でどうやってルームメイトとつき合うの？　彼女は毎日ブタ肉に触らないようにお祈りしてるっていうのに、あんたがブタを食べて部屋に帰ったら、彼女に対する裏切りじゃないの？」

私は伸ばした右手を引っ込めて、すっかり狼狽してしまった。阿燕は乾し肉の皿を私の目の前に突き出して言った。「食べな、たべな。冗談よ」

「惜しいわよね、誰があんたをマレー娘と同居させたの。でなきゃ何切れか持って帰ってゆっくり食べられたのに」ト蓮が不満気に言った。

私は彼女たちに何も言い返せず、ひどく自尊心を傷つけられた。

「ありがと！　のどが痛かったのを忘れるところだったわ」言い終えるとすぐドを開けて外に出た。ト蓮が後ろから追い討ちをかけた。「あの野良猫がまた来てるわ

よ。

　あんたの部屋に入っていくのを見たわ。どうなってるの？　あんたは猫と同居してるの？」

（前掲書『東南アジア文学への招待』255-256ページ）

よく読めばわかるように、この作品に登場してきた「私」及び「卜蓮」や「阿燕」や「秀美」はマレーシア華人の化身のような存在であり（その名前がこのことを雄弁に物語っている）、「ハヤディ」はいうまでもなく卜連の指摘したように「マレー娘」である。マレーシアにおける最も人口の多い二大民族――マレー系住民と中国系住民の代表のような人物がこの作品のなかで出会うのであった。異民族の出会いであり、異文化との触れ合いである。

思うに、異文化を理解するのに座標が必要であり、「衣食住、風俗習慣、礼儀作法はそのバックボーンをなしているが、冠婚葬祭、祝日節句、交通手段、性のいとなみ、容貌、皮膚の色、髪の毛の形…といった生活の細部のすべてがこの範疇に入る」（拙著『異邦人と Japanese―異文化とは何か　国際理解とは何か』、白帝社、1997年、19ページ）。シルビア・シエンによるこの『親愛なるデニス』という小説において、異文化（具体的にはマレー文化と中華文化）が出会ったときに、その衣食住（ここでは具体的に食をさしていう）が他者文化の一部として見えてき、認識や理解のずれを生んでしまう――「こらこらこら、これは乾しブタ肉よ。なんであんたが食べるの？」「ブタ肉よ！　ブタ肉食べた後でどうやってルームメイトとつき合うの？　彼女は毎日ブタ肉に触らないようにお祈りしてるっていうのに、あんたがブタを食べて部屋に帰ったら、彼女に対する裏切りじゃないの？」。

その答えを簡単にではなく、マレーシア華人の歴史に求めるのが客観的、科学的な方法論だといえよう。

　賃金労働者として渡来した移民にはもともと農業入植者はいない。しかし一九三〇年代の世界的経済不況期に鉱山や農園で失職した華人は、生きる方法を求めてマレー人の農村の外縁部――村と森林の境界地域へ無認可の移住を行い、米、野菜、果物の栽培、豚やニワトリの飼育を細々と始めた。

（『もっと知りたいマレーシア』、弘文堂、平成6年12月15日第2版、62ページ）

かくして、マレーシア華人は中国にいたときもそうであったように、マレーシアにおいても豚を食するようになった。そして、そうした生活習慣から、宗教上の食べ物に対する禁忌、具体的にいえばイスラム教におけるブタ肉への禁忌は理解しにくい。ゆえに、

「ブタ肉よ！　ブタ肉食べた後でどうやってルームメイトとつき合うの？　彼女は毎日ブタ肉に触らないようにお祈りしてるっていうのに、あんたがブタを食べて部屋に帰ったら、彼女に対する裏切りじゃないの？」のような発言もみられたのである。すると、異民族間・異文化間の理解は永遠に不可能なのであろうか。

五

以上述べてきたことからわかるように、シルビア・シエンの小説・『親愛なるデニス』の主人公は華人の「私」でもなく、マレー人の「ハヤディ」でもなく、「デニス」という猫であろう。このような小説をシルビア・シエンが書いたのは何故か。言い換えれば、シルビア・シエンがこの「猫」を通して読者に何を伝えようとしているのか。以下、具体的な分析を通して論を展開していきたい。

前出の「ちぇ！たった一匹の猫のことで、私たちの関係はとても緊張したものになった。私は一九八七年の中南街を思い出した。（五・一三事件以来、最も民族間が緊張した一九八七年の国内治安法発動時の記憶を指す）」という緊張した時期を経て、「私」と「ハヤディ」の関係は少し改善されるようになった。そのきっかけはやはり「猫」（デニス）であった。

> 「イスラム教の歴史で、モハメッドが袖の上に猫が眠っていたので、袖を切り離して猫を起こさないようにしたって読んだことがあるけど、本当なの？」ハヤディのご機嫌をとるために、私は猫好きのせりふをスラスラ吐いた。彼女はますます喜んで、しばしこの話題で盛り上がった。
>
> この日からハヤディは、しょっちゅう猫を抱いて部屋に入ってきた。勉強の合い間にはたいていデニスに話しかけていた。か細い声で「デニス、寝てるの？　どうしてこんなに怠け者なの。早く起きなさい」とか、やさしく頭を撫でながら「キスしてもいい？」ハヤディは本当に身をかがめてデニスのおでこにキス！　こんなことを半日もやっていた。私はこんな様子を見るたびに悪寒がした。ハヤディはわかっているのかしら、あの野良猫がしょっちゅう便所の水を舐めていることを。
>
> あるとき、私も自分がわからなくなった。はっきりしているのは、あの憎たらしい猫のこと。でも猫好きのふりをしているのはハヤディの歓心を買うため。これって正しいのかしら？　ハヤディがマレー人の女の子で、二人がつき合っていくために、私はこんなふうに取り繕っている。これって、誠実なのだろうか。
>
> （『東南アジア文学への招待』、段々社、2001 年、254-255 ページ）

「イスラム教の歴史で、モハメッドが袖の上に猫が眠っていたので、袖を切り離して猫を起こさないようにした」かどうかはさておき、「猫」は緊張した「私」と「ハヤディ」の仲を取り持ってくれた。現に「私は猫好きのせりふをスラスラ吐いた。彼女はますます喜んで、しばしこの話題で盛り上がった」からである。

しかし、「これって、誠実なのだろうか」と「私」が自問したように、これで異民族間の理解、異文化間のコミュニケーションがとれたことにはならない。では、「ハヤディがマレー人の女の子で」、「私」は華人である。この二人の間に真の信頼関係を築いてくれたのはやはり猫のデニスであった。

> ハヤディはそれから病気になって、私は彼女の世話をするほか、彼女の大事な猫の面倒も見ざるを得なくなった。ハヤディは病気ですっかり弱っていても、猫がちゃんと食べているか心配していた。「食堂に行ってデニスのご飯を買ってきてくれない？」と私に頼んだ。私は食堂に駆けていって、大盛りの白米とおかずをちょっぴり求めた。食堂の主人はマレー人の老人で、私が猫のご飯を買いに来ているとわかっても、疑っているようだった。「ルームメイトの猫よ。私はルームメイトの猫に買っていくの」と言った。「そんなに仲がいいのかい。お互いそんなに仲がいいのかい」おじいさんはぶつぶつつぶやいた。私には彼が私と猫が仲がいいのか、それとも私とルームメイトが仲がいいと言っているのかわからなかった。でも彼は意外にもこう言った。「お金はいらないよ。あげるよ」ご飯とおかずの包みを手にしたまま私は固辞したが、彼は手を振って行くように合図した。私は礼を言って立ち去るほかなかった。（中略）
>
> すっかり落ち込んで部屋に戻ると、ハヤディは食堂のおじいさんがお金を受け取らなかったと知って、すっかり喜んでデニスに呼びかけた。デニスが飛んできて、ハヤディはやさしく猫を抱き、ご飯を食べるのを見ながらずっと小さな声で話しかけていた。私はそばで静かに、この人と動物との隔てのない様子を見つめていた。デニスへの先入観がだんだん薄れていった。もし人と人がこんな打算のないつき合いをしていけたら、私たちの住んでいる世界は、多くの謂われのない争いや摩擦を減らせるんじゃないかしら？
>
> （同上 263-265 ページ）

デニスのご飯とおかずを契機にマレー人と華人の友好関係（やがて信頼へと）が始まったのである。「そんなに仲がいいのかい。お互いそんなに仲がいいのかい」というマレー人の老人のつぶやきは実に意味深長だ。「私には彼が私と猫が仲がいいのか、それとも私とルームメイトが仲がいいと言っているのかわからなかった」からだ。しかし、いず

れにしても、マレー人が華人に対し、実際の言行でもって、友好的な態度を示すようになったのである（「お金はいらないよ。あげるよ」ご飯とおかずの包みを手にしたまま私は固辞したが、彼は手を振って行くように合図した。私は礼を言って立ち去るほかなかった）。そして、華人の「私」が持ってきたマレー人の老人の気持ちをこめたご飯とおかずを食べた猫のデニスにも変化が見え始めた。

> 夜は雨が降った。夜中に起き出して、寒くて布団の中で縮こまっていた。突然、私の足の裏に何か触るのを感じた。ふわふわしてあたたかいものが私の足を温めた。幽霊事件はもう終わっていたので、ちっともこわくなかった。うとうとしながらも、それがデニスであるとわかっていた。猫の温かい体が冷たい足の裏にくっつくと、何か奇妙な感じでうっとりした。私は猫をベッドの下へ蹴らずに、足をくっつけたまま、引き続き安眠することにした。お互い認め合い、私たちはこれからっずっと一緒だろう。
>
> 私はこっそり言った。「おやすみ、デニス」
>
> （同上 265-266 ページ）

華人の「私」にとって、マレー人のルームメイトが飼っている猫のデニスが「かたき同士」（同上 251 ページ）であり、「デニスー、死んでー、帰ってこないでー」（262 ページ）と呪ったりもした。その関係はまさにマレーシアにおける華人とマレー人のそれに似ているのではないだろうか。

だが、その後の双方の関係改善の努力によって、よい兆しが見え始め、やがて「私の足の裏に何か触るのを感じた。ふわふわしてあたたかいものが私の足を温めた。幽霊事件はもう終わっていたので、ちっともこわくなかった。うとうとしながらも、それがデニスであるとわかっていた。猫の温かい体が冷たい足の裏にくっつくと、何か奇妙な感じでうっとりした。私は猫をベッドの下へ蹴らずに、足をくっつけたまま、引き続き安眠することにした」という微笑ましい光景が読者の眼前に現れた。そして、作者がはっきりと言うのである、「お互い認め合い、私たちはこれからっずっと一緒だろう」。これは前出の「私はそばで静かに、この人と動物との隔てのない様子を見つめていた。デニスへの先入観がだんだん薄れていった。もし人と人がこんな打算のないつき合いをしていけたら、私たちの住んでいる世界は、多くの謂われのない争いや摩擦を減らせるんじゃないかしら？」と同じく、作者が作品を通して読者に言おうとすることではないだろうか。

思うに、人と人の間に「打算」があるゆえに、「認め合い」はできないゆえに、「私たちの住んでいる世界は、多くの謂われのない争いや摩擦」が生じてくる。だから、作者

がこの作品に『親愛なるデニス』というタイトルをつけているが、その行間を読むと、「親愛なる華人」「親愛なるマレー人」「親愛なるマレーシア」「親愛なる私たちの住んでいる世界」といったメッセージがそこから伝わってくるのではないだろうか。

付記：本稿は平成24年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C課題番号：23520425）の交付を受けて行った研究成果の一部である。